

非人称的な時代、個の尊重問う

筑摩書房 3132円

「人と人が対面しているとき、いったい二人のあいだには何が起きているのか。私はなぜ相手の顔をまじまじと、りんごを眺めるように見ることができないのか」。このシンプルな問いを端緒に、「ガンをつけられ、頭に血が上った」という事件記事から現代哲学理論まで、多彩な論点の本書では扱われている。自分のまなざしと相手のまなざしが重なる瞬間、人は相手の目の奥を探ろうとし、両者の間に「対面的磁場」が発生する。これは相手を意識のある対等な存在と見なすからであり、人はリアルなアンドロイドの目にはたじろいでも、稚拙なロボットには反応しない。

哲学者マルティン・ハイデガーは人間相互の「我と汝」という対面的な関係と、人間と物との間の「我とそれ」関係を対比した。哲学者エマニュエル・レヴィナスもまた、理性による「普遍的な総合の試み」としての認識とは別のところに、人間同士の対面を位置付けた。そこでは顔は視覚の対象ではなく、かけがえない自己として迫り、「汝殺すなかれ」と倫理的な命令を発してくるものとされるのである。

著者によれば、そもそも「対面は西洋的」であり、日本のように自他の境界があいまいで「〈個〉のないところには十全な意味での対面もない」。しかも、典型的に対面的な戦い方である決闘が西洋でも消滅したように、対面性は衰退の一途を辿っている。決闘が消えたのは、戦争が高度に機械化されたからであった。同様に、今日のインターネット世界では、匿名性が技術的に確保される中で、無責任な誹謗中傷が蔓延している。

非人称的な時代へのこうした移行は、個の尊重という倫理性の喪失につながるのか。気づまりで煩わしくても、他者と見つめ合うことを避けてはならないのではないか。短い文章を集めた、軽妙な「顔」の奥から、本書は重い問いを差し向けていく。

対面的〈見つめ合い〉の人間学

大浦 康介〈著〉



大浦康介 京都大学文学部教授（文学・表象論）。著書に『誘惑・実践篇』など。

評・杉田 敦

政治学者・法政大学教授